

『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史』 ——ドキュメンタリーからの挑戦——

人文学系教授 西岡 達裕

キーワード：オリバー・ストーン監督、アメリカ史、原爆投下

はじめに

『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史 (Oliver Stone's Untold History of the United States)』(以下、『もうひとつのアメリカ史』)は、映画監督O・ストーンが歴史学者P・カズニックと共同で制作した全10回のテレビ・ドキュメンタリーである。2012年、アメリカ合衆国のテレビ局「ショウタイム (Showtime)」で放送され、監督自身がナレーションを担当した。同年出版された副読本 (Stone & Kuznick 2012) は、700ページを超える大冊であり、大量の注とともに学術書としての体裁を整えている。

日本では、2013年にNHK-BS1で放送され、副読本の日本語訳(全3巻)も刊行された。また、NHKでは、シリーズの見どころを伝える事前番組や、ストーン監督の来日時に制作された特別番組『オリバー・ストーンとヒロシマ』『オリバー・ストーンと語る原爆×戦争×アメリカ』(以下、『原爆×戦争×アメリカ』)も放映された。

今年(2015年)8月で原爆の投下から70周年を迎える。アメリカ人の間には、原爆投下のおかげで日本との戦争に勝利し、血みどろの日本上陸作戦を回避できたという国民的な記憶が残っている。そのため、アメリカでは、原爆投下の否定的な側面はあまり報道されず、被爆地の惨状を映像で学ぶ機会も少ない。『もうひとつのアメリカ史』は、そのような国内の状況を顧みて、原爆の投下から21世紀のアメリカ「帝国」の形成に至るまで、これまであまり語られてこなかったアメリカ史の陰の部分、映像資料とともに若い世代に語り継ごうとする試みである⁽¹⁾。

制作の背景と監督の問題意識

『もうひとつのアメリカ史』は、全10回のシリーズで、第二次世界大戦から現在に至るアメリカの外交と戦争の歴史を振り返る。「第1話 第二次世界大戦の惨禍」「第2話 ルーズベルト、トルーマン、ウォレス」「第3話 原爆投下」「第4話 冷戦の構図」「第5話 アイゼンハワーと核兵器」「第6話 J・F・ケネディ～全面戦争の瀬戸際」「第7話 ベトナム戦争運命の逆転」「第8話 レーガンとゴルバチョフ」「第9話 ”唯一の超大国” アメリカ」「第10話 テロの時代 ブッシュからオバマへ」。

ストーン監督がこの作品を手がけたこと背景には、彼自身がベトナム帰還兵として味わった幻滅が深くかかっている。その幻滅は、アカデミー賞に輝いた彼の映画『プラトーン』（作品賞）『7月4日に生まれて』（監督賞）において表現されてきたものだが、『ハフィントン・ポスト』紙のインタビューでも、彼の権力批判に戦争体験の影響があることは「間違いない」（千代 2013）と答えている。

ストーン監督と共同制作者カズニックとの出会いは1996年に遡る。彼は、アメリカン大学におけるカズニックの授業に講師として招かれ、夕食のときに原爆投下に関する修正主義の見解やリベラルな政治家ウォレス（Henry A. Wallace）の挫折についての話を聞いた。彼はその話に興味を持ったものの、当時は映画『ニクソン』が期待していたほど商業的に成功しなかったこともあり、類似の題材を再び取り上げる気分にならなかったという。しかし、10年後にカズニックと再会したとき、彼は、番組制作の企画をもちかけた（Hornaday 2012）。『原爆×戦争×アメリカ』によれば、彼は、保守的な家庭に育ったこともあり、「これまでの人生では原爆が必要だったと信じて」きた。しかし、修正主義の歴史学者カズニックとの出会いにより、日本を降伏させるために原爆が必要だったというのは「間違った神話」であり、そのような神話が「このまま伝えられてはいけない。正しい記憶が必要」だと思いついたのである。

カズニックとの出会いから10年後に、ストーン監督がこの番組の制作を決意した背景として見逃せないのは、G・W・ブッシュ政権期にアメリカが国際法を軽視する軍事大国となり、内外からの批判を集めていたことである。事前番組の中で、ストーン監督は、「ネオコンが台頭し、8年間のブッシュ政権を経て、アメリカの歴史を見直したいと思いました。私たちはどこかで間違ってしまった。それが私たちの原点です」と語っている。

『もう一つのアメリカ史』は、以上に述べた問題意識を背景として、アメリカ外交の公式的な見解に見直しを迫る修正主義の立場をとっている。ストーン監督は、事前番組で「番組は合衆国の真の目的を問いました。目的は経済力の追求と世界の軍事的支配のように見えます」と述べている。ただし、ストーン監督は、アメリカ政府の立場を批判する一方で、事前番組において、「常に体制を支持してきましたし、問題を起こすつもりもありません」と断っている。「事実を知って物の見方が変わったため、この結論にたどりついたのです。自分の国が間違っていたら、それを指摘すべきです。子どもが母親を愛すのと同様、生まれ育った祖国であるアメリカへの愛は変わりません。だからこそ自分の国の間違いは正すべきなのです」。

雄弁な歴史の物語

『もう一つのアメリカ史』は、メッセージ性の強い作品であり、歴史が雄弁に語られている。作品の第一の特徴は、修正主義の中でも急進的なカズニックの歴史解釈をベースとしながら、上述したストーン監督の問題意識に沿った形で、シリーズ全体を貫くシナリオがつくられている点である。すなわち、ストーン監督はカズニックとの共同作業を通して、アメリカの外交がいつから道を誤り、ベトナム戦争やイラク戦争に見られる不必要または過剰な軍

事力の行使をするようになったのかを考察した結果、その起源は原爆の投下にある、という見解にたどり着いた。そして、本当は不必要だった原爆投下を正当化するようなアメリカ人の独善的な考え方が、イラク戦争やテロとの戦争に至るまで、安易に軍事介入を正当化する風潮やアメリカの軍事大国化につながった、というシナリオである。

より一般的な歴史の見方としては、戦後アメリカが強硬な外交路線をとるようになった理由は、戦間期における理想主義の限界を顧み、ナチスに対する宥和政策の失敗が、よくも悪くも「歴史の教訓」として作用した、というものであろう。現在でも、現実主義の外交論議は、そのような歴史観を土台としている。これに対して、『もう一つのアメリカ史』では、その結果として戦後のアメリカが過剰な軍事力を保有・行使するようになったことへの反省が促されているのである。

全10回の番組は、原爆の投下からブッシュ政権の先制攻撃論までのアメリカ外交史を一本の太いストーリーラインで結び、アメリカが「帝国」と化していく歴史的な眺望を鮮明に浮かび上がらせた。そして、最終回のナレーションで、アメリカ外交が抱えている問題を次のように総括している。「アメリカは、世界の警察官であるべきなのか。正義や融和、平和を守る力になっていたのか。[中略] 本当の目的はソ連への牽制であった日本への原爆投下、その正当化は、アメリカの優越性と安全保障神話の土台になっています。勝つために必要ならば手段は選ばなくてもいいと原爆は教え、その結果勝利し、勝利したゆえに正しいとされ、正しいがゆえに善と見なしました。そこには、アメリカの独りよがりな道德観しか存在しません」。

ただし、ストーン監督は、そのようなアメリカに絶望することなく、希望を失わない。彼は、歴史は必然ではなく、また、未来は変えられないものではないと信じており、だからこそ、今後アメリカが過去の失敗を繰り返さず、よりよい未来を切り拓くために、国家の陰の部分も含めた正しい歴史を学ぶ必要があると考えたのである。

この観点から、ストーン監督は番組の中で、現実とは異なるコースを志向した政治家の存在にも注意を喚起している。すなわち、ウォレス、マーシャル (George C. Marshall)、ケネディ、あるいはソ連のフルシチョフ、ゴルバチョフといった人々である。彼らは比較的平和的で進歩的なヴィジョンを持つ政治家であったが、不運な巡り合わせもあって道半ばで挫折し、結果的に保守的な圧力に屈した。そして、ストーン監督は、もし彼らが指導的な地位にあり続けていたならば、歴史はよりよい方向に向かっていただろうと示唆するのである。

指導者たちのドラマ

『もう一つのアメリカ史』が雄弁な歴史の作品となっているのは、メッセージ性の強さと歴史的眺望の明瞭さに加えて、大統領を始めとする著名な指導者たちの物語を中心に仕上げられている点にある。現実とは異なるコースを志向した政治家たちの挫折をサイドストーリーとしながら、メインのストーリーラインでは、指導者の間違っただけでなく、判断によってアメリカが過

剰な軍事力を蓄積・行使していく様子が描かれている。ストーンが映画監督であること、また、この作品がドキュメンタリー番組であることを考えれば、人物中心の構成となったことは肯ける。しかしながら、歴史的な観点からすれば、個々の政治家のリーダーシップによって長期的な歴史の流れを説明しようとするのは一長一短である。

カズニックによれば、『もう一つのアメリカ史』とは、端的に言えば、「アメリカ帝国とナショナル・セキュリティ・ステート（国家安全保障国家）」(Liebersohn 2010)の形成の歴史である。そして、番組では、トルーマン、アイゼンハワー、ジョンソン、ニクソン、レーガン、ブッシュといった指導者たちが、過剰な軍事力を蓄積・行使する「帝国」の建設者として描かれた。歴史学者L・ガードナーは、「多くの人々が不可能と思っていたことをやってのけた」、すなわち「彼らは、いかにしてアメリカが意識された諸決定を通じて帝国と化したのかを教えてください」(Gardner 2012)と評している。

しかしながら、多くの人々、特に歴史学者たちが、そのような歴史の描き方を「不可能」だと思ってきたことには理由があるはずである。E・H・カーが『歴史とは何か』で述べたとおり、「悪王ジョン学説——歴史で問題になるのは諸個人の性格や行動であるという見方」は「歴史的意識の原始的段階の特徴」であり、社会的諸力や無意識の作用を十分に考察しなければ「わざと片目を閉じて仕事を始めるようなもの」だからである(カー 1962: 68, 62)。

たとえば、ストーン監督は番組の第3話で、「実際のハリー・トルーマンは、[伝記作家]マックカロウが描く英雄的な小心者よりも邪悪な人間です」と誹謗したが、そのような人格攻撃は、歴史を冷静に考察する上では弊害にもなりうる。また、第4話では、「冷戦に突入した原因は、ソ連ではなくアメリカの方にあるのです。すべてはトルーマンの大統領就任初日から始まりました」と語られている。たしかに、「すべては～から始まった」というようなナレーションは、テレビ番組用のレトリックだと割り切れればよいかもしれないが、ドラマ性とメッセージ性のために厳密さが犠牲にされている印象は否めない。

他方、ストーン監督は、1944年選挙でトルーマンの代わりにリベラル派のウォレスが副大統領候補に選ばれていれば、歴史の流れは大きく変わっていたことを示唆し、その選挙でウォレスが指名を逃したのは、民主党内のボス政治による妨害があったためであるということ、ことさらドラマティックに描いている。ウォレスの挫折は、映画『スミス都へ行く』(1939年)の場面を引用しつつ効果的に演出されており、事前番組のインタビューでは、そこが歴史の分岐点であり、「もしウォレスが大統領になっていれば、日本に原爆が落とされたと思えませんか」とまで語られた。

たしかに、ウォレスの件は歴史のif(偶然や未練)の問題を考える上で格好の題材であり、ウォレスの再評価を求める声は以前からあった(安藤 2007)。筆者自身もかつて拙書の中で「もしかして[ウォレス]が大統領でも、戦後の原子力政策は、現実と変わらないコースを一直線に突き進んだといえるであろうか」(西岡 1997:296)と述べて、冷戦期の野放図な米ソ核軍拡競争について、指導者次第では一定の歯止めをかけられる可能性がなかったかを問いかけたことがある。実際にウォレスは、ソ連との交渉の積極的な推進を訴えていたからである。し

かしながら、原爆の投下については、ウォレスは、1941年以來、副大統領として最も早い段階から秘密の原爆開発計画があることを知っていたながら、それに反対したことはなかったし、疑問らしきことを述べた記録もない。したがって、彼が大統領なら原爆は投下されなかったかもしれないという推論には、具体的な史料の裏づけが何一つない。

また、番組では、軍上層部の多くの将軍たちが原爆の投下について批判的な発言を残したことを紹介することによって、本当は必要でなかった原爆を使用したトルーマンの「悪王」ぶりが印象づけられている。しかし、将軍たちの発言はすべて戦後における事後談であり、彼らは原爆投下の必要性がないことを事前に大統領に伝えていなかった。原爆は陸軍の管轄であったのだが、本来、原爆投下の作戦上の判断について主たる責任を負うべきマーシャル参謀長に関しては、その作戦を慎重に検討する代わりに、原爆の開発を担当していた工兵隊の将校に軍事的な作戦計画までも丸投げしてしまった。番組では、マーシャルは、現実と異なるコースを志向したヒーロー役とされているが、彼の行動は責任を回避するものでしかなかったのである。

さらに、『原爆×戦争×アメリカ』のインタビューで、ストーン監督は、広島と長崎にそれぞれウラニウム型とプルトニウム型という異なるタイプの原爆が使用されたことについて「実験」のためであったと述べているが、そうした推測には根拠がない(山田 2014)。カズニックは「もしトリウム型爆弾を持っていたら、三つ目の都市が破壊されたでしょう」と述べて、推論の上に推論を重ねたが、むしろ補足されるべき事実は、長崎への原爆投下後、トルーマンがそれ以上の原爆の使用をためらい、3発目の原爆を大統領の許可なく投下しないように命令を出していたことである。

このように、この作品は、悪玉トルーマンと善玉ウォレスに代表される指導者たちのドラマとして映画的な脚色が施されることによって、巧みに視聴者を番組に引き込む代わりに、歴史解釈についてミスリードする危険性も孕んでいる。

歴史教育と政治運動の間

テレビのドキュメンタリー番組は、多少の間違いや解釈の飛躍があった場合でも、視聴者が面白いと感じさえすれば、それほど大きな問題とはなりにくい。一般に、ドキュメンタリーの制作は、学問を深めるための手段ではなく、視聴者へメッセージを届けるための手段であり、演出のために多少なりとも厳密さが犠牲にされていることは、視聴者の側もある程度は心得ているであろう。しかしながら、この作品に関しては、制作中から早くも論争を呼んだ。

真っ先に批判の声を上げたのは、R・ラドッシュである。元マルクス主義者でありながら後にネオコンに転向したユダヤ系の歴史学者ラドッシュは、その企画を陰謀論の好きな映画監督と左翼の活動家まがいの大学教員の共謀と見て、あからさまに嫌悪した。彼は、制作者の関心が学問の探求ではなく、左翼的な宣伝にあると断じたのである(Radosh 2010)。

これに対して、カズニックは、ストーン監督との共同計画に参加すればラドッシュから受けた類いの中傷からは免れないが、影響力の大きい監督と組むことで得られるメリットと比

べればそれも「小さな代償」にすぎないと割り切った。カズニック自身、「真の動機は、数万ではなく数千万の聴衆に届けられるという見込みにあった」(Liebersohn 2010)と述べている。

結局、この作品は、本来アカデミズムとエンターテインメントの世界のそれぞれの住人が、その中間にあるドキュメンタリーの領域に歩み寄って合体し、歴史教育と政治運動の間のきわどい境目で制作したものと見ることができる。

作品の公開後、ラドッシュは、それを「オリバー・ストーンがリサイクルした左翼のアメリカ史」(Radosh 2012)と皮肉った。また、歴史学者S・ウィレンツは、作品タイトルの「Untold History (語られざる歴史)」にもかかわらず、実際は過去半世紀にわたる修正主義の解釈を寄せ集めたものであり、同作は「チェリー・ピッキング」(多くの事例の中から自説に有利なものだけをとりあげる詭弁術)であるとして批判した(Wilentz 2013: 14)。

これに対して、ストーンとカズニックは、まず「チェリー・ピッキング」はほかならぬウィレンツ自身にとって馴染み深い手法であるとして、ウィレンツの著作『レーガンの時代』を槍玉に挙げた。そして、彼らは、「ウィレンツは、他のすべての歴史家と同じように、彼の命題を支持する事実を選び出している」(Stone & Kuznick 2013。下線は引用者が追加)と指摘したうえで、自分たちの場合は自身の「バイアス」について包み隠すこともなく、副読本の序論の中で、アメリカ史のすべてや栄光についてではなく「むしろアメリカが犯してきた過ちにスポットライトをあてることに関心がある」と明確に述べたはずだと反論した。

ただ、「チェリー・ピッキング」という表現が適切かどうかは別として、自身の「バイアス」を明言していることや、歴史家は誰でも「彼の命題を支持する事実を選び出している」というような弁明では、学術的な厳密さについての疑問が十分に解消されるとも思えない⁽²⁾。

結びに代えて

『もう一つのアメリカ史』は、歴史学的新事実・新説ではないにしても、アメリカであまり教えられてこなかった歴史の暗部に光を当てた作品である。そして、多くの視聴者に対して、アメリカの過去の失敗に目を向けさせることによって、アメリカ外交の独善性について自省を促すよう、強いメッセージを送った。もしこの作品が冷戦期につくられていたならば、相当ヒステリックな反応が返されたはずであるが、国民に不評なイラク戦争やアフガニスタン戦争をすでに経験した今日では、比較的冷静に受け止められた。その意味で、この作品は時機を得たものであり、たとえば大手書店 Amazon.com のユーザー書評には、意外なほど多く好意的な反応が寄せられている。

国際社会におけるアメリカの独善的な傾向は、自由主義と民主主義を国是とする建国の歴史に深く根ざしている。アメリカが外国に対して行う介入は、多少の問題を含んでいるとしても、自由主義と民主主義のための「使命」の名において正当化されてきた。アメリカであれば許されるという「例外主義」は、時に過剰な軍事力の行使にもつながった。これに対して、ストーン監督は、アメリカ建国以来の「例外主義」という敵に真っ向から挑んだ。みずからの正義を確信する「例外主義」の立場は、他者から見れば容易に批判的となるが、これま

で確信を持ってきた本人たちにその問題性に気づかせることは容易でないはずである。そのような聴衆を感化する試みは、アカデミズムよりもジャーナリズムの仕事であり、ストーン監督の絶大な影響力なくしてはほとんど成しえなかったのではないか。

この作品は、アメリカ外交を擁護する正統主義の歴史解釈が主流であることを前提として、それに対するカウンターバランスとして制作された。しかし、日本においては、その点でアメリカと同じ前提があるとはいえ、作品の持つ意味合いには多少のズレがあるであろう。

もし原爆投下の正当性を否定するこの作品を見て、日本の視聴者がもっぱらナショナルな観点から被害者意識を強めるだけであれば、作品の意図とは異なる。『もう一つのアメリカ史』では語られなかったが、2013年8月、ストーン監督は広島平和記念式典に参列して「私たちは皆、あの日、ここにいたのです」(『オリバー・ストーンとヒロシマ』)と述べ、その後、韓国人原爆犠牲者慰霊碑にも参拝した。そこでの彼の言動が物語るのは、大量破壊兵器の前では国籍の違いはないというヒューマニズムと世界市民の意識である。また、ストーン監督は、2003年にイラク戦争が始まると、ドイツなどの国々とは異なり、日本がアメリカに追従して戦争に協力したことを批判した。日本の視聴者には、21世紀の国際社会の中で、アメリカの「例外主義」とどのように向き合うべきか、という課題が突きつけられた形である。

注

(1) ストーンは、第1話のオープニングで「今の若い人々は昔と比べてしっかりと世界観を持っていないと危惧している」と述べ、歴史を学ぶことの意義を強調しつつ、教育的な意図を語っている。また、別のインタビューでは、当初は主な視聴者として「ティーンエイジャー」(Jewish News 2013)を想定したと述べている。

(2) たしかに、どの歴史家にも「バイアス」はあるが、もしそれをそのまま視点・方法として用いるのでは学問とは呼べない。実証的な歴史の研究とは、本来、問題意識に基づいてテーマを設定しながらも、「命題を支持する事実」であれ史料批判によって信憑性を確かめ、他の史料が指し示す事実との関係を整理する中で合理的に解釈を導き出し、それによって自身の問題意識に付随する「バイアス」による歪みをも補正し、学問として可能な限りの厳密さを確保しようと試みるものである。

引用文献

- Gardner, Lloyd C. (2012). Editorial Review in "The Untold History of the United States Book by Oliver Stone, Peter Kuznick." *Simon & Schuster*. Retrieved from <http://books.simonandschuster.com/The-Untold-History-of-the-United-States/Oliver-Stone/9781451613520>.
- Hornaday, A. (2012). "Oliver Stone's Untold History of the United States: Facts through a New Lens." November 12, 2012. *The Washington Post*. Retrieved from http://www.washingtonpost.com/lifestyle/style/oliver-stones-untold-history-of-the-united-states-facts-through-a-new-lens/2012/11/11/958e2088-2b6a-11e2-bab2-eda299503684_story.html.
- Jewish News. (2013). "interview: Oliver Stone and Peter Kuznick on The Untold History of the United States." *Jewish News*. July 10, 2013. Retrieved from <http://www.jewishnews.co.uk/interview-oliver-stone-and-peter-kuznick-on-the-untold-history-of-the-united-states/>
- Lieberson, D. (2010). "Oliver Stone's Secret History: An Interview with Peter Kuznick." March 10, 2010. *History News Network*. Retrieved from <http://historynewsnetwork.org/article/124005>.
- Radosh, R. (2010). "I Thought Howard Zinn was Bad Enough. Now We Have to Learn Our

- History from Oliver Stone.” January 12, 2010. *PJ Media*. Retrieved from <http://pjmedia.com/ronradosh/2010/01/12/i-thought-howard-zinn-was-bad-enough-now-we-have-to-learn-our-history-from-oliver-stone/>
- Radosh, R. (2012). “A Story Told Before: Oliver Stone’s recycled leftist history of the United States.” *The Weekly Standard*, 18 (9). Retrieved from http://www.weeklystandard.com/articles/story-told_660176.html.
- Radosh, R. (2013). “The Continuing Stalinist Delusions of Oliver Stone and Peter Kuznick: A Final Assessment.” January 18, 2013. *PJ Media*. Retrieved from <http://pjmedia.com/ronradosh/2013/01/18/the-continuing-stalinist-delusions-of-oliver-stone/>.
- Stone, O. & Kuznick, P. (2012). *The Untold History of the United States*. New York: Simon & Schuster.
- Stone, O. & Kuznick, P., reply by Wilentz, S. (2013). “‘Untold History’: An Exchange.” March 21, 2013. *The New York Review of Books*. Retrieved from <http://www.nybooks.com/articles/archives/2013/mar/21/untold-history-exchange/>
- Wilentz, S. (2013). “Cherry-Picking Our History.” *The New York Review of Books*. 60 (3), 14-16.
- 安藤次男 (2007) 「異端の副大統領ヘンリー・A・ウォーレス——ポスト冷戦時代の視点から」『立命館国際研究』19 (3) : 617-633
- カー、E. H. (1962) 『歴史とは何か』岩波書店
- ストーン、O.& カズニック、P. (2013) 『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史』全3巻、大田直子・熊谷玲美・金子浩ほか訳、早川書房
- 千代明弘 (2013) 「『戦場に行ったこともない奴が語る愛国主義には吐き気がするよ』オリバー・ストーン監督に聞く戦争と歴史」『ハフィントン・ポスト』2013年8月14日。Retrieved from http://www.huffingtonpost.jp/2013/08/13/oliver-stone_n_3752018.html.
- 西岡達裕 (1999) 『アメリカ外交と核軍備競争の起源 1942-46』彩流社
- 山田康博 (2014) 「異曲同工——アメリカはなぜ異なる2種類の原爆を日本に対して使用したのか」アジア太平洋研究会『アジア太平洋論叢』(20), 3-22
- 『オリバー・ストーンが語るもう一つのアメリカ史』(NHK-BS1、2013年)
- 『オリバー・ストーンと語る原爆×戦争×アメリカ』(NHK-BS1、2013年)
- 『オリバー・ストーンとヒロシマ』(NHK-BS1、2013年)